

# IPCCとPolicy Relevance 今後の報告書への期待

地球環境産業技術研究機構

参与

山口光恒

# policy relevance

## Edenhofer博士他の見方

- IPCC評価報告書のpolicy-relevanceと言う基準は広く受け入れられているが、実際にはこうはなっていない。それはpolicy relevantな評価の実施に多くの重大なTrade-offや障害があるからである。例えばcontroversialであるが社会的には適切な側面は薄められるか評価されない。こうしたことが評価報告書が政策に有用なものとなることを大きく阻害している。
- 他方政策に有用な研究や報告は、社会的・政治的観点からは非常なバイアスがかかっているとして、しばしば批判される。この事は特に（自然科学ではなく）意見の対立があり価値判断に関わる政策判断に当てはまる

# Policy Relevantな報告書に向けて

- 費用便益分析
- 実現可能性
- 多面的評価 (Risk/risk tradeoff)
- 気温目標以外の目標の提示

# 費用便益分析(CBA)の必要性

- 世界の課題 希少資源の最適利用  
あれもこれも→あれかこれか(経済学の課題)  
政治家にとり気候変動以外にも重要課題
- IPCC SAR 1995の見方  
伝統的CBAをそのまま適用は困難。不確実性は感度分析、  
経済効率以外の問題は複数の選択肢をしめす方法で補う。  
これをModern CBAで、政策に有用である。  
問題は結果の数値ではなくそのプロセスである。

# 実現可能性（2°C/1.5°C目標）

- コストの過小評価

モデルによる最小費用での削減（世界共通単一炭素税）は現実的か、これを是正する努力

- 2°C或いは1.5°Cに向けての前例のない大幅削減にはどのような困難があるのかの明示  
そのための部門別技術、社会変革の可能性  
（肉食制限、航空移動制限）

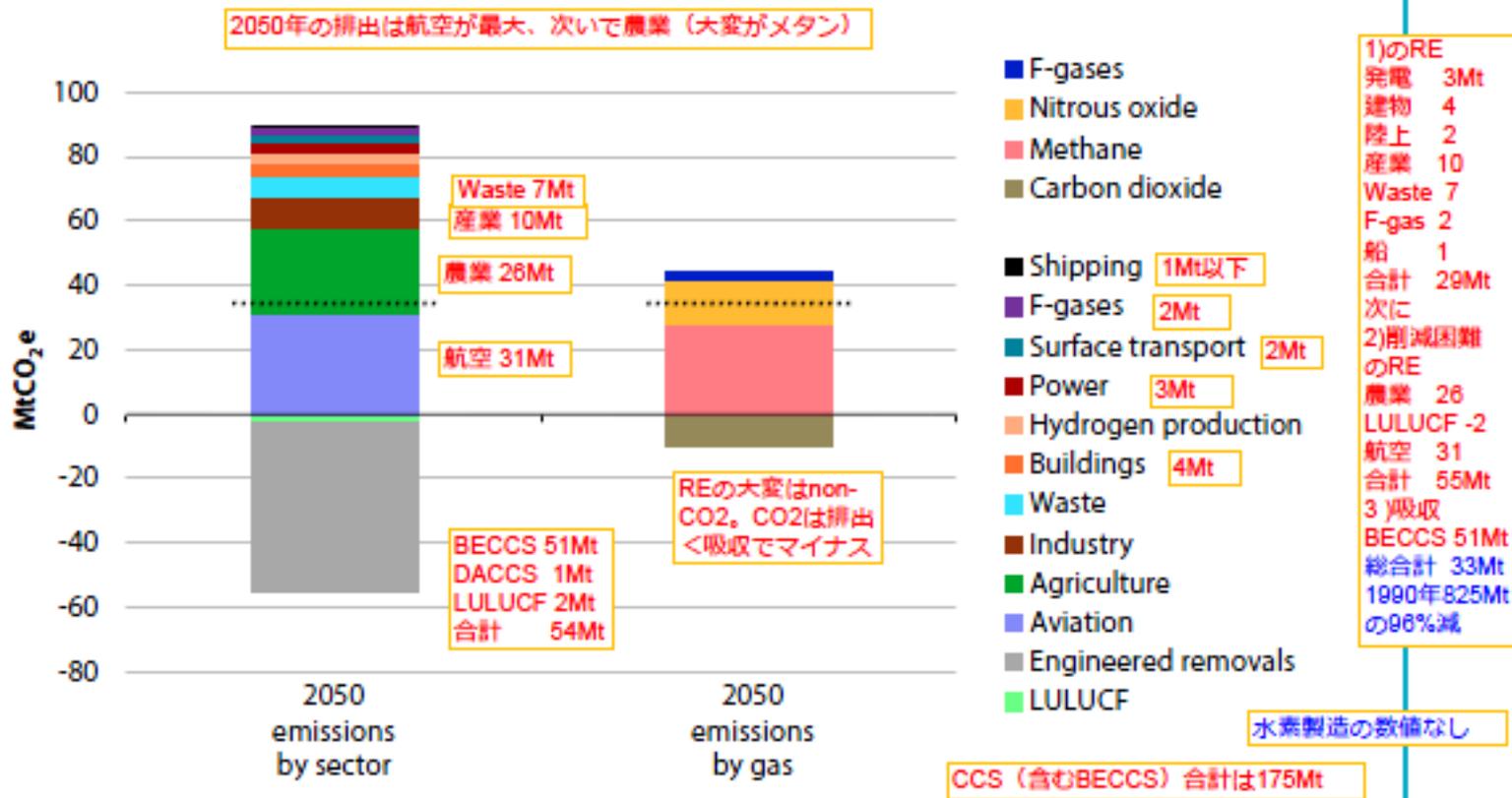
- 大量のマイナス排出の現実性

IEAの最新シナリオでは原則としてマイナス排出を排除

# イギリス2050年 Remaining emissions

## 下記のような計算が有用

Figure 5.5. Remaining emissions in the Further Ambition scenario by sector and gas (2050)



Source: CCC analysis.

Notes: Dotted line shows net emissions in 2050, taking into account negative emissions. Figure includes high estimate of additional peatland emissions and is based on the current inventory GWPs (see Box 5.1).

# Risk/risk Trade-off

異分野の専門家のIPCC執筆陣への参加

- BECCSと種の多様性、食糧安全保障
- 気候変動とエネルギー安全保障
- 気温上昇のリスクとSRMのリスク
- 気温上昇のリスクと原子力のリスク
- CO2深海投棄とロンドン条約(海洋汚染)

IPCCの執筆陣にバイアスはないか



# 気温目標以外の目標の提示の動き パラダイムシフトに向けて

- 気温目標は行動目標とはならない
  - 気候感度に3倍の開き
  - 国や産業などの指針とはならない
- しかしCO2排出が続く限り気温は上昇
  - これはなんとしても避ける必要あり
- 大量のマイナス排出に依存しないnet zero排出目標へのパラダイムシフト

IPCC報告書ではこうした論文を報告書で取り入れ、政治家に選択肢を示す (policy relevant)